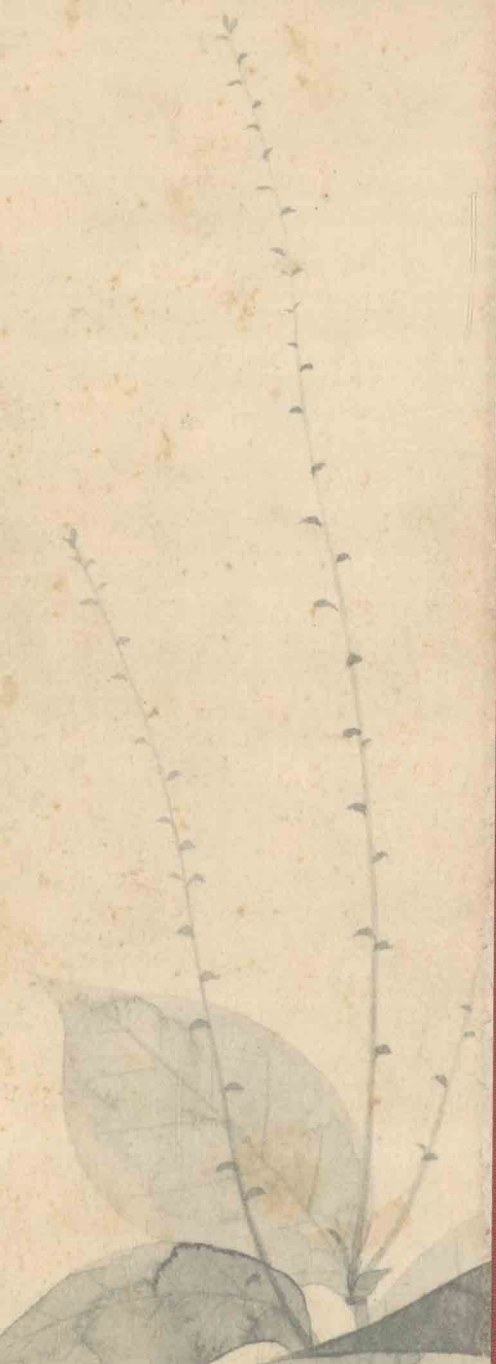
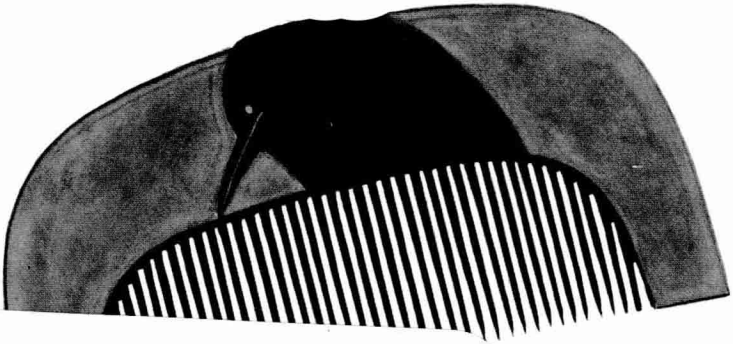


光琳の櫛



光琳の櫛

昭和五十四年六月二十日　発行
昭和五十四年九月三十日　四刷

定価一一〇〇円

著者　芝木好子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部〇三―二六六―五一一一
編集部〇三―二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　製本・株式会社大進堂
© Yoshiko Shibaki, Printed in Japan, 1979

# 目次

第一章　黒髪　5
第二章　光琳の櫛　69
第三章　櫛の縁　137

装画
扉文字

佐多芳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 光琳の櫛

# 第一章　黒髪

尋ねる家は赤坂の賑やかな通りをそれたゆるい坂の途中にあった。料亭というには控え目な京風の露地の奥のうちで、垣がめぐらしてある。高垣は香島玲子のあとから目をあげて軒燈の「雪園」の文字を確かめた。思った通りの家居だった。ここの女主人の噂を聞いた時からぜひ訪れてみたいと思ったが、うまく段取りがついて今日の運びになったのである。

玄関までの敷石を渡りながら、午過ぎとはいえ三十代の男と、それより若い女が連立って入るのは面映い隠れ家のように思ったが、高垣は仕事だったから真直に歩いた。清められた玄関先へ出迎えた若い女中はしとやかに、お待ちしていましたと言う。すぐに案内されて中廊下を渡ると奥深くひらけた家で、坪庭の先の離れに通された。狭い女竹の庭がある。今度の仕事で高垣が人を取材訪問するのはこれで三人目である。大学で美術史を教える彼は市井のコレクターの持つ蒐集品をたずねて、歴史や伝統や生活を探りながら著書を纒めようとしていた。香島玲子は出版社から廻された助手だが、この仕事には熱心だった。今日の女主人を紹介したのは

能面の蒐集家で、時たまこの料亭へくる客の一人だということだった。たまにしか来ない、ということが肝腎らしく、馴れすぎるのはきらいだと洩していた。気難しい客を取りしきるのが女主人の役とみえる。世の中には女の髪を飾る櫛や笄を集める者は多いはずだし、現に女流華道家や舞台の役者に有名な蒐集家もいるのだが、高垣はこの女主人の噂を聞くなり心を動かされたのだった。能面の蒐集家は櫛のことは門外漢だが、女のことを、

「あれは、気狂いや」

と一言で片付けた。自身の蒐集狂いをほろ苦く重ね合せているようだった。

女中がお茶を運んできて、下がると、高垣と玲子は都会の中のしじまに気押されたように沈黙した。次の間に人の気配がして、襖が明いた。紺無地の紬を着た、四十代の女盛りを生きている、そういう風情の女が現れた。襖の前に坐っただけで様になってい、黒髪を束ねて鼈甲の簪を挿しているが、色白の顔の輪郭が調って、切れ長な目は、能面なら増女という面に似ている。

「今朝ほど梅塚様からお電話をいただきました」

と久住園は物やわらかに挨拶した。

「梅塚さんはなにか言っていましたか」

「はい、ほどほどにおつきあいしなさいと」

高垣は苦笑した。

「梅塚さんは垣を作る人ですからね」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「能面とだけ話をするお人ですから」
「まったく底の知れない人物でした。所蔵の面もどれほどか計れないくらいでした。しかし思ったより気持よく出してくれましたよ」
「それはよろしうございました」
　女主人は思いのほか飾り気がなかった。
「あちらは能面を次つぎと箱からお出しになるのでしょうか。私は折々あちらさまから面のお話をうかがうせいか、どうも能面が怖うございます。話しているお方の顔が歪んできて、目が空洞に見えたりします。能面を並べて眺めるさまを想像すると、身が竦みます」
「面が人形のせいでしょう。確かに凄い面もありますからね。変化もので般若など角を生やした発想はおもしろいと思いますよ」
「裂けた口から金色の歯がのぞくのも、怖さの誇張が利いております。能に、恋寠れして、亡霊となった老人の出てくる演目がありますが、あの面も秘蔵しておいでだそうですね」
「氷見宗忠の痩男ですか。室町中期のものだそうで、鬼気迫る名品でしたよ。こう、唇の色が枯れて、衰え果てた相です。香島さんはあの晩ゆめで魘されたらしい」
　高垣が玲子を見返ると、園は真顔で頷いた。
「お若い方なら、そうでしょう。梅塚様は夜更に亡霊やら悪霊やらの面を並べて、どんなおたのしみなのでしょうね」
　久住園は自然に出てくる言葉をつくろわずに口にのぼし、高垣はすぐそれに答えた。どうい

うわけか会話は旧知のように弾んで運んだ。玲子はさっきから二人の顔を交互に眺めていたが、引きこまれて言った。
「私は娘の亡霊を現わす夢幻能の女面を見た時もふるえましたわ。高垣先生、あれは『井筒』と言いましたか」
「そう。『筒井筒、井筒にかけしまろが丈』の女面でしょう。あれも印象的だった。数百年前の面で、色褪せていながら色香を失わないですね。能面というのは情念や妄執を世々に伝える仮のかたちですか。梅塚さんも言われるのです、女面は目を伏せている時、冷い物体に見えるが、ほんの少し上を向けると表情が動いて、うすら笑んでくると。その妖艶さにぞっとするんじゃないですか」
俯き加減の園が目をあげると、女面が動くように、表情が変った。
「能面にのめってゆくのは、正気ではございませんわ」
彼女の言葉に、高垣は思わず笑いかけた。蒐集家はどの道正気とは言えまい。
「確かに面は妖怪ですよ。能役者は面を付けた瞬間、変身するわけです。面の相に転じてゆく。能面はやはり演者のものでしょうね。梅塚さんには悪いが」
「それはそうとも申せませんわ。蒐集家は夜半に女面を顔に当てて、ぶつぶつ独り言しているかもしれませんし」
彼女の想像には真実味があった。高垣は真顔になって訊ねた。
「梅塚さんとそんな話をされますか」

「物を蒐集しますおひとは、そんなものかと思いますの」
女中が二人黒塗の盆に料理をのせて運んできた。料亭へ取材にきてそのままとはいかないので玲子は簡単なものを注文しておいたが、運ばれたのは上等の膳部であった。女中が高垣と玲子へ酒を注いでまわった。女主人は上背を伸して笑みをうかべている。
「櫛、笄の蒐集にも、能面と同じ気持がありましょうね」
高垣はごく自然に話の向きを変えていた。能面蒐集家と向きあっていた時の緊張した空気と違って打解けた気分だが、やはり窺い知れないものを彼女も身構えのうちに感じさせた。
「どの位コレクションされましたか」
思いきって聞いてみたが、実のところ見当もつかなかった。
「櫛とかんざしと合せて、さあ、数千点もありましょうか」
「大した数ですね」
「一時は二万点ほど持っておりました」
彼女は事もなげに言った。
「さすが梅塚氏の御推奨だけあるなあ」
「いいえ、持っていた、などという話は意味がありません。それも長年かかって集めたものを、たった一日で手放したのですから」
彼女の口許に渋い表情がうかんだが、客相手のせいか厭味にならなかった。なぜ手放したか、高垣も馴々しく聞けなかったし、彼女の境遇の大事なところに踏みこみそうな気後れもあった。

櫛を見にきて立入りすぎるのを憚った。しかし久住園は自身を飾ろうとしているのでもなかった。高垣がどの相手にも発する蒐集品との出合いを訊ねると、ありのままに話した。

「ずっと花町に育ちましたので、美しい女や、髪飾りは、たくさんに見てきました。私の母なども悲しい女のほうですが、かんざしは良いのを挿していました。私も若くて芸妓に出ていましたが、温習会の舞台で初めて一人立ちの『黒髪』を踊りました時、人より目立ちたい一心で、道具屋から櫛を探してきましたのですよ。それが櫛との出合いと言えましょうか」

上等な櫛で、長いこと大事にしました、と言った。さらっと物をいう女で、わざとらしさはなかった。女中が櫛箱を運んできた。三つ抽出の塗箱で、園が上の抽出を引きぬくと、高垣も玲子もじっと目をあてた。女が女の髪の装飾の品々に手をかけると、いかにも優しく映る。抽出の中は精緻な作りの飾りもので、大奥の女中がかざしそうな豪華な金蒔絵の櫛や、象牙に象嵌の月と鳥、銀地にすかし彫りの胡蝶の櫛などが並んでいた。錺職人が丹精こめて細工した見事さは、櫛、かんざしをつけたさまざまな女の顔を想像させるのであった。きれいに手入れして、鬢付油の匂いもしない櫛を高垣は手にとった。年代物の黄楊の角櫛は、町家の女房が前髪に挿したのか、櫛の目が細かい。

「これは佳品だ。櫛の幅や厚みに対して、櫛の歯がいかにも繊細だ」

飾りのない櫛のゆかしさを高垣は感じた。

「その櫛の目ですと、前髪にきっちりと挿しこめます。その代り手入れはかないません。すぐと髪埃りがつきますから。昔の女は大事にしたことでしょうが」

「どことなく角櫛でいて粋だから、幡随院長兵衛のおかみさんが挿したかしれない」
高垣が愉しげにいうと、園はやわらかく櫛の山を撫でていった。高垣が気を許して心を弾ませるのを玲子は初めて見た気がした。
「金蒔絵の桜模様は、さしずめ大奥の江島ですか」
「それは徳川家から他家へお輿入れの姫の櫛でしょう。定紋入りの櫛箱がついていました」
「よく手に入りましたね」
「髪飾りの類はつぼさえ心得ていれば手に入ります。今となっては無用の飾りものですから、手放す方が多うございます」
彼女は次の抽出を引抜いて、丁寧な手仕事の感じられる飾りものを慈しむようにみたが、それは『在原業平道行図』であったり、『源氏物語絵巻』であったりした。櫛の上部に、薄野の業平と姫が語らう蒔絵で、華やかさと気品にみちていた。櫛が並べば、次の抽出は簪であった。銀の平打、珊瑚や瑪瑙の玉飾りがある。吟味した品々はどれも女の黒髪に似合いそうで、蒐集家の美意識を感じた。
「この椿の簪はきれいだ。娘の挿し物ですか」
「それは若妻の飾りでしょう。初めは手にとるのもいやなほど汚れていましたが、椿の型に惹かれて買求めました。見ていると、水死した女の濡れた髪に絡んだかんざしに思えてきました。かんざしの根に髪の毛が一筋巻きついていて解けないのです。一夜かけて静かに清めてやりますと、おどろおどろした暗さが薄れて、椿が愛らしい作りの顔を覗かせてきましたの。嫁入っ

て不幸せになった女の怨みがかんざしに籠っていたようで、椿が不気味に黒ずんでいたのでした」

「生き還って、幸せな簪ですね。銘がありますか」

「さいですねえ。時には作者の銘もあります。羊遊斎とか、巨柳とか、春正とか。でも名もないものに佳いのもございます。銀のぴらぴらのついたかんざしが一対ありましてね、双子の姉妹が挿していたのですが、姉の嫁ぐ前夜、妹がかんざしの先で喉を突いて死んだと言います。かんざしの先がつぶれていましてね。それはもう手作りの見事な一対ですの。お見せしましょうか」

彼女の光った目の色を、高垣と玲子は凝視した。

「そう聞くと、一個の簪が取分け意味を持ちますね」

「作り話とお思いになりますでしょう。道具屋の仕方話はもっとおもしろいのですが」

園は艶な表情で声もなく笑ったが、簪を運ばせようとはしなかった。

「疲れた夜更けなど、櫛、かんざしを見ていますと慰められます。とめどなく話しかける櫛や、ひんやりと意地張った櫛や、また俯いたままの櫛などありましてね。日によってその一つを手にとってやりますと、他の櫛が嫉ましげにします。人の形見に貰いました櫛は、わけても扱いがむずかしいのです」

これでは能面を慈しむ者となんの変りもない、と高垣は思った。

「江戸期から親代々伝えられたものも多いでしょう。財産保持でもあるし」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.